論文の内容の要旨

論文題目　ケアギビング行動の性質を定める心理的基盤の発達と機能の検討
——アタッチメント理論の視座から——

氏名　　大久保圭介

本稿は，ケアギビング行動に関する心理的な表象（internal working model of caregiving）の性質を行動システムの不活性化および過活性化に対応するものとして捉え，その特性的な傾向（以下，ケアギビング傾向とする）の発達と二者関係における機能を明らかにすることを目的とした。それらの目的を達成するために，本稿では，第 1 部として先行研究のレビュー研究（研究 1），第 2 部として測定法に関する研究（研究 2 と研究 3）を行ったあと，第 3 部でケアギビング傾向の発達に関する 4 つの研究（研究 4 から研究 7）と第 4 部で二者関係における機能に関する 3 つの研究（研究 8 から研究 10）を行い，最後に第 5 部として総合考察をまとめた。

第 1 部（研究 1）では，理論研究として，アタッチメント理論をベースとして展開されている「ケアギビング」に関する研究をレビューし，現在までに何が議論されており，今後明らかにしていく必要がある課題について明らかにした。ケアギビング行動システムは私たちの対人関係においてアタッチメント行動システムと同等以上の重みで関わるはずの重要な行動システムの一つであるにも関わらず，これまでの研究では，親子関係や親密な二者関係のケアに関する側面もアタッチメント傾向の個人差によって説明されてきたという背景がある。発達的な観点からも，ケアギビング行動システムがアタッチメント行動システムよ

りも遅い段階で必要となる行動システムであると考えられるが故に，その特性的な行動傾向がアタッチメント傾向の発達にどの程度根差すものなのか，複数の理論的な可能性が想定されてきた。元々行動システムは領域特異的であり進化的にも別個の機能を持つものである。そのことを踏まえて，第 1 章では，本稿では両者の行動システムを別個のものとして捉えるという理論的な立場を表明した。そして，両者の行動傾向の関連を検討するために，ケアギビング傾向の発達と，対人関係，特に親密な二者関係におけるその機能を明らかにする必要性を主張した。

ケアギビング傾向の発達プロセスについてある程度明らかになったとすれば，今度はその個人差が生涯においてどのように機能するのかを検討する必要がある。恋愛関係において，アタッチメント傾向のみで関係性を予測した場合に結果が一貫していないことなどを取り上げ，ケアギビング傾向の影響も検討する必要性を主張した。また， circle of security（以下，COS とする）の観点から親のケアギビング傾向が子どもの発達に与える影響についても検討する必要性を指摘した。

第 2 部では上記のような課題に取り組むことに先立って，行動システムの二次的戦略である不活性化および過活性化によってケアギビング傾向の個人差を測定する尺度を作成した。研究 2 では Shaver らによって作成された the Caregiving System Scale（以下，CSS とする; Shaver et al., 2010）の日本語版を作成し，合計 4 つの研究によって妥当性と信頼性を確認した。また，私たちは対象によってケアギビング傾向の性質が異なる可能性がある。しかし，同時に異なる他者に対するケアギビング傾向を CSS によって測定するには，参加者の負担が大きすぎる。そこで研究 3 ではより少ない項目の尺度を構成することを試みた。すでに公刊されている 4 つの国のデータを再分析し，参加者の能力をより敏感に識別できる項目かつ，国際的に共通した項目を抽出した。結果として，十分なテスト情報を保持している約半数の項目数の尺度項目を構成することができたと言える。

第 3 部では，ケアギビング傾向の発達機序を明らかにするという目的のために 4 つの研究を行った。研究 4 では，ケアギビング傾向の発達を明らかにすることに先立って，保護者の自由既述をもとに，テキストマイニングによって，幼児期から児童期までの年齢の違いによる子どものケアギビング行動の質的な変化を探索的に示すことを試みた。その結果，年齢が上がるにつれて，身体的に働きかけるケアから情緒的なケアへと変わっていく様子や，自分にできるケアを理解し，適切に他のソーシャルサポートを使用するようになるという質的な変化が示唆された。少数ではあるが，不活性傾向と過活性傾向両方の特徴を示す関わり

方をする子どもがいることもわかった。本研究では，予め不活性傾向および過活性傾向が高いと考えられる子どもを抽出したが，それぞれにおいて幼児期の段階からその傾向の高さを特徴とするケアギビング行動を示す子どもがいることも確認された。

研究 5 では，より長期的な視点で，幼児期から青年期前期，および青年期から中年期に入るまでのケアギビング傾向の標準的な発達軌跡を示した。不活性傾向はなだらかではあるものの，幼児期から児童期中期まではなだらかに低下し，その後は上昇していくこと，そして 20 代前半あたりまでそのなだらかな上昇は見られ，以後は大きな変化が見られないという軌跡が示された。過活性傾向は幼児期以降なだらかに上昇し続け，20 代後半あたりから徐々に低下していくという軌跡が示された。限られたデータの分析であるものの，ケアギビング傾向それぞれの特徴的な発達軌跡を示すことができたと言えるだろう。本研究で示した軌跡は，アタッチメント傾向の標準的な軌跡とは異なる発達軌跡を示すことがわかった。また，青年期前期までは，得点の高さに明らかな性差が見られたことも本研究の有意義な結果の一つであると言えるだろう。

ここまでの研究では，幼少期におけるケアギビング行動の発達とその特性的な行動傾向の生涯的な発達の軌跡を示してきた。続く研究 6 では，そのようなケアギビング傾向の発達に関する課題の一つとして，世代間関連の検討を行った。自己評定で測定していることによって過剰に推定されている可能性があるが，それでも，子どもの親に対するアタッチメント傾向の個人差は友達に対するケアギビング傾向の分散の 2～24%ほどしか説明していないことが示された。青年期前期の親子関係に関しては，アタッチメント傾向の個人差によって説明することのできない直接的な関連が，特に過活性傾向に関して見られた。また，親のケアギビングそのものではなく，それをどのように知覚しているかという被養育経験も子どものケアギビング傾向に独立した影響を与えていることも示された。

続く研究 7 では，ケアギビング傾向の個別的な変化パターンと親子関係以外の関連要因を検討するために短期縦断的な調査を行った。結果としては，ケアギビング傾向が大きく変化する人はわずかであり，ほとんどの人が不活性傾向および過活性傾向が高いまま，あるいは低いまま，大きく変化することなく推移していくことが示唆された。変化パターンに大きな個人差が見られなかったため，変化に資する外的要因の影響は十分には検討できなかったが，親子関係以外の要因として友人関係の良さや自尊感情の高さが特に 1 時点目の得点の高さと関連していることが示された。

続く第 4 部では，機能的な観点からケアギビング傾向の効果を検討するために，合計 3 つ

の研究を行った。本稿では COS の観点から，親密な二者関係における探索をアウトカムに据えて，ケアギビング傾向の影響とその影響に対するアタッチメント傾向の調整効果について検討した。第 1 章で指摘したように，これまで恋愛関係の性質はアタッチメント傾向のみによって予測されてきたことを踏まえて，研究 8 では，恋愛関係にある男女を対象にした研究を行った。結果としては，各々のケアギビング傾向とアタッチメント傾向の関連を踏まえた上で，男女ともに過活性傾向が探索行動と関連することが示された。ただし，その影響はケアを受ける側のアタッチメント傾向によって調整されることも示された。本研究において，不活性傾向はいずれも有意な関連が示されなかった。

青年期以降の重要な対人関係が恋愛関係であるならば，成人期以降にケアギビング行動が重要な機能を持ちうるのは親子関係である。そこで研究 9 では，子どもの探索に対する親のケアギビング傾向の影響を検討した。なお，研究 8 では探索に対するケアギビング傾向の影響のうち，COS における安全基地機能（secure base）のみを検討していたため，研究 9 では悩みの低減に対するケアギビングの機能，すなわち安全な避難所機能（safe haven）の検討も行った。親子ペアの分析を行ったところ，特に不活性傾向が子どもの悩みの高さと関連していることが示された。すなわち，安全な避難所機能に関しては，私たちのケアギビング傾向のうち，相手のケアの必要性を知覚することができないことにつながる不活性傾向が重要な役割を担っている可能性が考えられた。ただし，研究 8 とは異なり過活性傾向の有意な効果は示されず，子ども側のアタッチメント傾向との交互作用効果も有意ではなかった。

そして，第 10 章では，より内面の探索に焦点を当てて，高校生のアイデンティティの探索に対する親のケアギビング傾向の影響を検討した。ケアギビング傾向の 2 次元の違いによる明確な結果の違いは示されなかったものの，特に父子関係において父親のケアギビング傾向が子どものアイデンティティの探索に有意に影響することが示唆された。特に，父－娘関係においては，娘のアタッチメント傾向の影響を受けない直接的なケアギビング傾向のネガティブな影響が示された。

最後に第 4 部の総合考察において，本稿で得られた知見とその実践的・理論的な示唆を整理し，限界点と今後の展望を述べた。